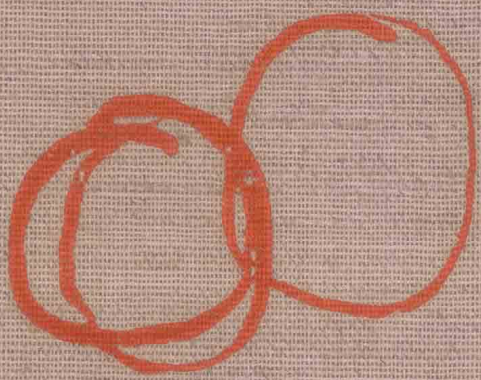

高見順全集

第八卷

勁草書房刊

高見順全集　第八卷

定價二五〇〇圓

昭和四十五年四月十五日印刷
昭和四十五年四月二十五日發行

著　者　高見　順
發行者　井村壽二
印刷者　山田　博
發行所　勁草書房
東京都千代田區神田駿河臺二ノ三
電話東京二九四（六一二一）
振替東京一七五二五三
©高見　順　一九七〇
〔〇三九三—八三二四—一八三六〕

目次

響かない警鐘　9
華やかな劇場　13
短篇三つ　20
秋の挿話　29
生きてゐるめるへん　39
秋から秋まで　53
植木屋と廢兵　77
用造のはなしと吉造のはなし　88
堤を行く救濟婦人會　106
序　118

塀の欲望 127
檻の低級闘士 138
強い女 153
圖書館 155
戰場——ガストニア紡織大爭議の一斷面—— 166
ガストニアの歌——ガストニア紡織大爭議の一斷面—— 186
毒素——ガストニア紡織大爭議の一斷面—— 211
私生兒 232
猛者 240
侮辱 244
時代 248
三・一五犧牲者 263

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

肉親 274
雨――二月の記録―― 283
オシャカ 287
反對派 292
感傷 302
世相 307
空の下 331
霙降る背景 341
朝顔 355
起承轉々 357
流れ藻 372
私生兒 384

菊坂ルムペン會 402
脱脂綿 409
とつての友だち 418
路地 432
晴れない日 444
嗚呼いやなことだ 478
鳩の飛ぶ空 499
虚實 504
雲 521
白い手をした男 527
生理 533
寒い路 547

人の世 559
腕 567
川風 569
解説 澁川驍 575
解題 586

短篇小說一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

響かない警鐘

……

チェホフの「農夫」といふ短篇の中頃に、「聖母昇天祭の夜の十一時頃」の火事のことが書いてありますね。そして「警鐘は頻りなしに亂打されて居た。」と書いてありますね。たしか。……でも問題は、キリヤークや父親のオシップの、アルコールが、ケーキーのチョコレート見たいに部厚く塗られてある、心臓の瓣膜は、その怪物の呻吟の様な、亂調子の警鐘を、どう聞いたかと言ふ事ですよ！……さて……

……

巡査小野木の、蠶豆の様な靴の醜鈍な曲線は、車掌臺の隅に、乘換へしてからずつと、固定した儘です。重壓された爆發氣の様に彼の心は他の刺戟の浸潤を頗る危險視したのです。即ち彼は極めて冷靜な沼のおちつきを欲します。彼は今日は、禮儀ある弔客として振舞ふことを決心してゐます。……で彼は空の旅行カバンを夢見てゐます。

「霞町！　霞町！　お降りの方は御座いませんか？　霞町！　霞町！」

袖の内につもつた埃を擴大した様な、灰色の帽子が巡査の前を流れます。つづいて褐色の帽子、黑色の帽子、帽子帽子。

「青山、澁谷、六本木方面の方おのりかへ！　お早くねがひます！」

溫かい空氣が車外に滑り落ちて、冷たい晩秋の空氣の層をからだの周圍に寒天の様に凍らせて居る帽子が、階段を踏んで入つて行きます。巡査の手は外套のポケットの布をぎゆつと握つたのでした。

「動きます。次は笄町！　どなたも切符を切らして下さい」

彼はまるで冬眠の爬蟲類ですね、いはば。彼の手は機械人形のぎごちなさを以て、車掌の耳のあたりに搖れます。

「こんど、降りますから……」

でも、あ！　落葉し了つた樹の太い幹のくねりに彼はたうとう脫衣して健康な裸婦を見ました。彼の心は交尾期の猫の様に唸り出しました。（彼はやはり、造物主から受けた本能的意慾にややともすると燃え出でんとする剛膽な若者なんです。）彼は唾を呑んで、電車を降りました。同僚の死を悼む弔客としての、謹直な自分を今日は最も必要とすると、彼は

深く深く考へて居たのですが。然し同情の顔貌、悲哀の表情を彼は、薄い假面とはいへ、用意してゐます。
横町に這入ると、小野木巡査は、線香の煙の暗鬱な重味が、自分の身體にズキッズキッと蛭の様に吸着してくるのをすぐと感知しました。
「御免下さい。」線香の灰が、自らの重みでスッーと音無く落ちる様が瞳に浮んできました。

忌中　渡部學而、十二日午前三時死去仕候

「どうぞお上り下さい。」玄關の隣りの六疊は、何かの工場の様に、紫の煙が屋中を馳けて居ます。いろいろの頭が白布で覆つた棺に向けられて居ます。洟をすすり上げる音がひとつの頭から頭へと波の様に傳つて行きます。彼女は何處に居るのだらうと小野木は遠慮深く眼を見廻しました。
「さあ、さあ……さあ、どうぞ御燒香を。」隣家の婆の鋭い小さい眼が彼の眼とぶちあたりました。嘗て格闘して捕へた、狡猾な圖太い掏摸の眼を思ひ出しました。「さあさあ……さあ、どうぞ御燒香を。」
既に、彼は沈香の濃い煙に頭をひたし乍らも『あの魅力ある、窒息的な臭ひは大低の人の心を單純な悲哀、それは例へ聯想作用によつていろいろの種類に分たれるでせうが、一様に悲哀感の軌道を走らせるものですが』彼は彼の親しい同僚渡部の死に對する錯雜した感情を整理して、ひとつの軌道を進ませる事は出來ませんでした。
渡部は死んだ……渡部は小野木の友だ……だから渡部の死は小野木には非常な悲みである。悲愁！
渡部は美しい若い妻を殘して死んだ……獨身の小野木は渡部の妻に强い愛着を感じてゐる。……だから渡部の死は小野木にある嬉しい事件をおこしうる可能性を齎らしたのだ。歡喜！
全身の筋肉纖維が、鼓膜の様に無節制に振動し初めるのを、小野木は抑へる事は出來ません、彼は沈香を思ひきり澤山つまみました……（隣りの部屋に違ひない）彼はよろける様に立上りました。
果して渡部の妻の泣き疲れた、蒼白い顔がなよなよと深海の海草の様に、隅に顫へてゐました。
（なんといふ氣の毒なことだ。……なんといふ運命の暴虐だ……）
（なんといふ美しい顔だ線だ……なんといふ若さだ……ああなんといふ俺の喜びだ……）
「奥さん。なんと申していいか……どうもこの度は。」
「はい。夢の様でございます。」
「つい二三日前迄、私と一緒に署で、笑つてゐましたのに。」
「……はい。……ほんとに……。」
「あんまり突然で……」

「……はい。……なんにもわかりません。」
「……」
「……」
彼は今迄の限定されてゐた愛着を、はじめてひろびろとして自由な愛を感じました。曙の太洋が彼の前に限り無く展開されて行きます。（俺はなんといふ幸福なんだ。渡部の生は俺の感情を全然抹殺してゐた。俺の存在を否定してゐた。だのにこの偶然！　この偶然！）小野木は正しい求婚者としての自分を感じ、自分の髪をさらさらと誇らし氣に撫上げました。
（彼女に言はうか！　いやまだ早い。あんまり失禮だ。待てまだ。まだ待て！）
（彼女に今は言はずに置かうか。いや機會を失するといけない。言へすぐ！）
その時、弔客の内の親しい、話しずきのものが、彼の面前にガヤガヤッと闖入してきました。
「お氣の毒でございますね」（もうわかってゐる。）
「ほんとにお氣の毒でございますね」（もうわかってゐる。俺が。）
「ほんとにまあお氣の毒でございますね」（もうわかってゐる俺が、俺が幸福にしてやる。俺が。）
「ほんとにほんとにお氣の毒でございますね」（もうわかってゐる。俺がお氣の毒でない様にする。）
「君達は、どうして奥さんの心にさう悲哀の增進劑をのみ塗りつけようとするのだ。それが君達の所謂慰めの言葉か。」と彼は危く吐鳴る所でした。彼等は蠶の糸を繰る様に「おしやべり」を續けました。小野木は無闇に腹立たしくなりました。
「普段から弱かつたといふのならまだしも……」
「さうですよ。所が渡部さんは風邪ひとつひかなかつたのですからね。」
「全く運命といふものは怖ろしいですね。」
「なくなつた渡部さんはまあ別として、奥さんが一番お氣の毒ですね。」（又か――豆腐屋！　默れ奥さんの事はもうよせ）
「お若いのにね。お察し致しますわ。」（婆！　何を言ふ俺がゐるぞ。この俺が。）
「渡部さんとお一緒になつてからまだ二年位にしかおなりにならないのでせう。ほんとにね……」（何がほんとにねだ。七十位迄はたしかに生きて見せるぞ俺は。この俺を見てくれ。今度は奥さんは幸福だぞ。靜かにしろ。駄菓子屋のおしやべり！）
「あんまり御酒をあがりすぎたのね。お若いのに。」（酒？　酒は俺だつて大好きだ。そんなことはない。）
「さうですよ。御酒ですつかりからだをこはして了つたので

すね。」（いやそんなことはあるものか！）

渡部の妻は俯向き乍ら彼等に言ひました。

「私もかねがね酒はからだをこはすと思つておりましたのですが、それで私は時々注意はしたのですが。やつぱり駄目でございますの。冬の寒い晩など、夜行を勤めて歸つてきますと、まるで全身石の様に凍へきつて了ひまして、酒を呑まないとどうしても寢つかれないさうでして。自分でもいけないと思つておりましても、矢張りどうも仕方がないのですね。その内にずんずん酒量が進んで參りまして……たうとう……。全く冬の寢番の歸りにたくの唇が紫色になつて震へてゐるのを見ますと、私もついいけないと思ひ乍ら、酒を用意して了ひます。なんとも仕方がなかつたのです。なんとも……」

小野木は額に陰鬱な皺を寄せました。然し彼は結局、渡部巡査の死の原因の全部を酒に歸するのは酷だ、酒はそんな怖ろしいものではないときめました。そして次の瞬間から彼はすぐ彼女と結婚出來るのだといふ幸福の豫感に自分を投げ込みました。溫室の様な、生命の力と香に充ちた部屋で、彼女と差し向ひで飲みうる酒の味はひを想像しました。彼は咽喉をゴウッと鳴らした。

……

「警鐘は頻りなしに亂打されてゐた」とチェーホフは書いて居ますね。他の人達には警鐘はどんなに怖ろしく響いたでせう。でも……

華やかな劇場

——それは華やかさを何處にどうして
どんな風に保つて居るか——

もつとも完全な各年度の市民死亡調査をもち、又あらゆる珍木を集めた國内第一の植物園をもつR市も五年前迄は未だそれが勇しく誇り得る眞に藝術的な近代劇場を持つて居なかつた。その時この「華やかな劇場」が近代劇を網羅したすばらしい上演目錄をひつさげて、R市の一角に突如誕生したのだつた。

華やかな劇場
華やかな鍵盤
華やかな心臓
華やかな動力
華やかな筋肉
華やかな花瓣
今ここに生る
讃ふ可きかな

年若い劇詩人等はそれはそれは大きな大きな花輪と、薄紫色の地に氣持ちのいい、ごくおちついた帶褐赤色の小紋散しのある緞帳と、上記の一聯に初まるそれはそれは長い長い禮讃詩とを劇場に呈した。劇場雜誌や演劇雜誌は爭つてその表紙に「華やかな劇場誕生記念號」と書きその主なる頁をさいて、この新しく誕生した劇場の有する演出者の卓越、舞臺構造の完備、演技者の優秀を語り興行政策に害されず永く藝術的な、成長を遂げんことを祈ると述べた。「華やかな劇場」は華やかな藝術であり、華やかな生活であり、華やかな生命だと澄んだカクテルに唇をぬらし乍ら、開場祝賀會の人々は評した。「華やかな劇場」の俳優こそ眞の藝術に抱擁された自由な魂の舞臺藝術家だと人々は評した。飢ゑた藝術家は、この劇場では自分の欲望が充たされるだらうと甚しい俳優志願熱が渦卷いた。

人々は「華やかな劇場」の華やかな藝術と共にそれに附隨した華やかな生活を信じた。さやう、薔薇の樣な華やかな生活を、魚の樣な華やかな生活を信じた。

尿酸過多のA女優は桃花心木（マホガニー）の様な色をした眼のふちの小皺をぶりんぶりんと痙攣させる。
「小使さん。ちよつと。あのね。カフェー・グラデナへ行つてランチ持つてこさして。」
海盤車（ヒトデ）の様な壯烈な色彩と荒彫りの皮膚とを持つた道具方がそのうしろでうなづいてゐる。
「大部、食慾旺盛ですね。うちの雞はよく食ひますが、どうも卵を生みませんでして。いや失禮。ははははッ。」
「あら失禮ね。朝ごはんですよ。起きてすぐ來たんですよ。でも今迄食べたくなかつたの。」
「へーえ。三時ですよ、もう。隨分たんとおやすみですな。ははッ。」
A女優は埃つぽい廊下の空氣に無數のおしろいのこなを撒き乍ら、ばたばたと廊下を走る。さて廊下のつきあたりの部屋にはいると、彼女は充分柔かい彈條のついた椅子に腰をおろして、紫檀の箱の中の、象牙の様に白く纖細な兩切煙草の一本をつまむ。
（今度の役は難かしいわ。放逸な若々しい娘の無智な單純な陰影をもたなくてはならない。それに晴れやかに歌を唱はなくてはならず。私に出來るかしら。私の聲はもう枯草の折れる音みたいだし……）
こう思ひ乍ら彼女は紫煙を細長く鏡にふきかけた。そして乳房を着物の上から輕く兩手でおさへ乍ら、鏡の内の自分の姿をじつと見つめた。
その時重い靴音がとまつて扉をノックする音がする。
「どなた。どうぞ。」
「あの、衣裳部の方はゐませんか。」
扉を開きかけ乍ら、そのすきまから舞臺畫家のW氏の模造乳酪のやうな齒列が愛相好く動いた。
「ええ。だれも居りませんのよ。ああWさん。私の今度の役のコスチュームはどんなですの。」
彼はにたにた微笑み乍ら、大きな鞄の中から一枚の厚い畫用紙を出した。
「あら！　變な頭飾（ウンドレス）被るのね。」
頭飾の、老いこんだ女の象徴の様な、色の惡い紫色がA女優の凹んだ、疲れた瞳を悲しく刺した。
（もつと若々しいのがいいわ）と彼女の力弱く老いた心臓が囁いたのだが、でも彼女はそれを唇に迄出すのを恐れた。冷笑と反抗をあからさまに、すべての男は彼女に對していつも表はして居る様に彼女は考へられてならなかつた。
「難有う。」彼女は部薄い頰肉を歪めた。

●

彼等は樂屋のそれぞれ當てがはれた部屋に六人宛珊瑚の様にごしやごしやと群りすんで居る。ああ彼等は、あるダダイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com